

園番号 710

令和4年度 奈良市立高円こども園 研究実践概要

園長名 織田 由起子

全園児数 100名

1. 研究主題

「たくましく、しなやかな心と体を育み、生き生きと活動する子どもを目指して」
～ひと・もの・こと との関わりを通して～

2. 研究年度

3年度

3. 研究主題設定理由

しなやかな心と体を育むために、0歳児から5歳児の発達を再確認し、共通理解することが大切と考えた。一人一人の子どもの姿からの課題やつきたい力を意識し、職員間の学びをさらに深め、保育内容の充実、環境の再構成を継続して実践し、子ども達の育ちにつなげていきたい思いから設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

身近な環境(ひと・もの・こと)との関わりを通して豊かな心と体を育て、自尊感情(自己肯定感)を高める関わりを工夫しながら、意図的に取り組み、生き生きと活動できる保育内容や環境構成の在り方について探り実践を深める。

②研究の重点

- ・乳幼児の豊かな心と体を育むために、発達や課題に応じた保育内容の充実や遊びを見取りながら、それに応じた環境設定や援助を実践していく。
- ・0歳児から5歳児までの発達過程を理解し、乳児期から幼児期につながる保育を探り、実践し、一人一人の育ちにつなげていく。
- ・職員間の連携や共通理解を図りながら、具体的な取り組みの方法を探り、保育の質の向上を図る。

③活動の方法

【0歳児】 「おどるのたのしいね」 6～12月

6月、園生活にも慣れ、童謡の曲を流すと笑顔で体を揺らし楽しむ姿が見られた。子ども達が興味を持つような体操の曲を流し保育者が踊り始めると、手を上にあげたり、たたいたり子どもたちも一緒に踊り始めた。毎日繰り返し楽しむうちに、体を左右に揺らしたり、膝を使ってリズムをとったりするようになってきた。まだ歩行できない子も楽しそうな様子に、思わずつかまり立ちをし、片手を離して同じように踊ろうとしたり、お座りの子も保育者がそばに座り、歌ったり手をとって一緒にリズムをとったりしながら誘いかけてみると笑顔がみられた。9月頃になると、子ども達から「あっあっ」とCDデッキを指差して曲をかけてほしいことを仕草で伝えるようになってきた。12月には、「バナナくんたいそう」で保育者と一緒に小さくしゃがんで最後に「バーナ」と言いながら手を大きく上げてポーズをとって楽しんでいる。また保育者が子どもと手をつないでゆらゆらしたり、回ったりする様子を真似て友達の手をとりによく姿も見られるようになるなど、月齢も発達もさまざまな0歳児クラスであるが、体を動かしみんなで楽しい時間となっている。

〈考察〉

日頃からトンネルくぐり、階段を四つ這いで登る、ハイハイでボールを追いかけるなど、全身を使う遊びを多く取り入れてきたことで体幹が育まれ、歩行も安定してきた。また好きな曲で手足や身体を十分に動かして楽しんだり、動けるようになったりしたことは、一人一

人発達段階は違うが保育者との安心できる関係の中で、体を動かすことが楽しいと感じ、身体面の発達も促されたと考えられる。

【1歳児】 「一緒にピョン！」 1月

階段を四つ這いで上り下りしたり、トンネルくぐりや箱押しなどをしたりして、体を十分に動かす機会を生活や遊びの中に取り入れてきた。保育室では、ジャンピングマットを用意することで、マットの上で体を上下に揺らす、膝を使って跳ねるという動きを楽しみながら繰り返してきた。保育者がマットの上で子どもの手を取り、一緒に揺れたり跳ねたりすることで、より高く跳ねられるようになり、嬉しくて「もっと、もっと！」とジャンピングマットを指差しながら、保育者と一緒にしたいことを伝える姿もみられるようになった。秋頃になると、園庭での遊びで保育者がフープを並べ、その上を「ピョン！」と言いながら跳び進む姿を見せると、高月齢児を中心に、保育者の真似をして「ピョン！」と言いながらフープの中で跳ねることを楽しんでいた。次に、巧技台に板を渡した低い橋を作ると、保育者と片手を繋ぎ、「ピョン！」という声掛けに合わせて跳び下りることを楽しんだ。



〈考察〉

生活や遊びの中に、自然と体を動かす機会を意識して取り入れたことで、無理なく楽しみながら、体を育てることにつながった。その中で、保育者が近くで見守ってくれているという安心感や「できたね！」「跳べたね」「すごいね！」と保育者と楽しさや嬉しい気持ちを共有することで、「もう一回したい」「見て見て！」という意欲がふくらみ、何度も楽しんで挑戦する姿につながった。

【2歳児】 「大丈夫だよ、ここにいるね、待ってるよ。」 2月

2, 3歳児の園庭に新たに、今までより少し大きな築山ができた。築山を見つけた子どもたちは、喜んで走り寄り、すぐに登れる子は、上から「せんせー」「Aちゃん、おいで」などと呼び掛けてきた。A児は友達に呼ばれ、登ってはみたいが「こわいな」という気持ちが勝って、築山の下から見ていた。そこで、「一緒に行く？」と誘い掛け、A児の手をつなぐと、反対の手を斜面につき、踏ん張りながらゆっくりとてっぺんまで行くことができ、嬉しそうな表情を見せていた。その後、友達が斜面を駆け下り、保育者もそれに合わせて一緒に駆け下りると、A児は「こわい、おりられへん」と不安な表情を見せた。築山の下から「大丈夫だよ、ここにいるね、待ってるよ。」と声をかけると、斜面を踏みしめながらバランスを取り、ゆっくりと下りてくることができた。本児は山に登り下りできたことにとても満足そうで、「山に登れたね、嬉しいね。」と一緒にジャンプしながら喜んだ。そのことが自信となり、その後、何度も一緒に手をつないだり自分で登ろうとしたりし、山登りに挑戦した。



〈考察〉

体づくりのために、タイヤやウレタン積み木の上を歩くことや太鼓橋などを組み合わせ、簡単なサーキット遊びにも取り組んできた。初めてのことが苦手なA児であったが、保育者が側で見守り、励ましたり援助したりすることで、安心して何度も挑戦し、満足感を味わうことにつながった。繰り返し挑戦することで、全身運動やバランス力、体幹を鍛えることにつながってきていると考えられる。

【3歳児】 「できたー！もういっぱい！」 9月～10月

様々な体の動きが経験できるよう自由選択活動ではサーキット遊びに取り組んできた。9月には子どもの姿や興味に合わせ、全身の力を使ってよじ登る経験ができるように高く積んだ巧技台を組み入れた。喜んで繰り返し楽しんでいる子どもがいる一方で、A児は巧技台の高さが怖く、「怖いからできない」と挑戦しようとしなかった。毎日誘いかけ、保育者や友達が楽しんでいる姿を見て、興味が向き始めた。しかし、体の動かし方や力の入れ方が分からないのでよじ登れず、すぐに諦めてしまう。保育者が少しお尻を支えることで段々

とよじ登る感覚が身に付き、さり気ない援助を受けて「できた」ことが嬉しくて挑戦するようになった。毎日遊ぶ中で10月末には、自分の力だけでよじ登れるようになり、「できたー！もういっかい！」と繰り返し遊んでいた。泣きながら登園することの多かったA児が、この経験が本児の自信につながり、喜んで登園し、一目散にサーキットに向かうようになった。

〈考察〉

4月当初、体幹やボディーイメージの弱い子どもが多く、気持ちの面で不安定さも見られた。まずは保育者との信頼関係を築くことを大切に関わった。加えて、全身を十分に使って様々な動きを経験し、体を動かして遊ぶ心地良さから気持ちの安定につなげていけるようにサーキット遊びの環境を整えてきた。A児が出来た喜びを十分感じたり、またやってみようという思いを持ったりできるようになった。崩れやすかった姿勢も保持でき、様々な活動を楽しむことも増えた。繰り返し挑戦できる環境と、常に見守り、認めたり励ましたりする保育者の存在が大きいと考える。これらが子どもの心を安定・充実させ、更に挑戦したり継続したりする意欲や体の育ちにもつながったと考えられる。

【4歳児】 「先生、今日は〇〇しよー！」 11月

自由選択活動の後、「もっと遊びたい！」「片付けたくない」などと気持ちの切り替えが難しく活動の切り替えに時間がかかる姿が見られた。サーキット遊びや鬼ごっこなどを存分に楽しんだ後でも、続きは「また明日」ということや、この後は朝の会が始まるなど見通しが持ちにくく満足感を実感していない様子が見られた。そこで、保育室に入る前に、みんなで“増え鬼”“かわり鬼”“バナナ鬼”の3種類の鬼ごっこを取り入れてみた。思い切り園庭を走り回り、追いかけたり逃げたり、友達を助けたりし、保育者も共に楽しんだ。クラスみんなでそれぞれが十分体を動かして遊んだ達成感を感じることができ、終わった後も、「おもしろかったな」と友達と話す姿が見られた。これをきっかけに、保育室に入る前に“みんなで体を動かして一つ遊ぶ”という楽しみができ、日替わりで、しっぽとり、縄跳びタイム、大縄跳び、タイヤ跳び、じゃんけん遊びなど運動遊びの時間を取り入れた。クラスのみんなで取り組むことで遊びが盛り上がり、存分に体を動かすことで切り替えや運動が苦手な子も友達と一緒に遊ぶ楽しさ、心地良さを感じていた。自ら体を動かすことが好きになり気持ちや活動の切り替えがしやすくなった。

〈考察〉

自由選択活動の時にもそれぞれ体を動かして遊んでいる子もいれば、そうでない子もいた。みんなで取り組むことで、普段体を動かした遊ぶことが少なかった子も友達と一緒に体を動かす楽しさを感じるきっかけとなった。みんなで遊ぶ中での遊びのルールや約束ごとを知り、守って遊ぶ楽しさも感じられるようになってきた。共通経験で感じた楽しさをきっかけに自由選択活動の中でも、またやってみたいという気持ちになり、友達を誘って遊ぶ姿が見られるようになってきた。この繰り返しのサイクルが遊びの満足感をより得られる経験となり、気持ちの安定や切り替えやすさにつながったと考えられる。

【5歳児】 「やってみよう！」 1月

自由選択活動の中でジャングルジムとグローブジャングルに綱を渡し、綱渡りのコースを設定した。子ども達はすぐに興味を示し、たくさん集まってきた。不安定ながらもすぐに渡れる子もいたが、やってみたいが、バランスを取ることが難しく、フラフラとし途中で諦めてしまった子も何人かいた。渡ることが出来た友達が「もっと高いここにロープを結びたい」「斜め向きのコースもやってみたい」等と保育者と一緒にロープの結び方を考え、より難しいことに挑戦し始めた。特に体を動かすことに苦手意識のあるA児に対し、「A君もやってみる？」と保育者や友達が何度も誘ううち、A児が挑戦し始めた。「やっぱり出来ない」と諦めそうになったが、友達がアドバイスをしてくれたり、応援してくれたりしたことで、何日も根気よくチャレンジし、ついに渡りきることが出来るようになった。友達と一緒にだからこそチャレンジし、出来たことに達成感を感じ、自信を持つことができた。



〈考察〉

体幹の弱さから姿勢の保持が難しい子が多く、遊びの中で様々な運動遊びを取り入れてきた。運動遊びに苦手意識を持った子はなかなか遊びに参加せず、誘っても諦めてしまうことが多かった。ロープを使った遊びを取り入れたことで、繰り返し遊んだり、苦手意識を持った子も友達の様子を見たことで興味を持ち、友達からのアドバイスや励ましを受けて挑戦するようになったりしてきた。子ども達の思いを受け、共に環境を再構成することで難しい動きにも挑戦し、遊びの達成感にもつながった。ロープを使った遊びを含めたサーキット遊びを友達と一緒に考え組立て、積極的に体を動かすことで体幹が育ち、姿勢を保って話を聞く事が出来る時間も増え、就学前に必要な力を身につけることが出来たと考える。

【長時間保育】 「今日もブランコする！」 10月～1月

午後のおやつ後、年長児がブランコをしている様子を見て、3歳児の数名の子ども達が「ブランコしてみたい！」と挑戦し始めていた。A児も興味を持ち、友達が楽しそうにブランコをしている様子を見ていた。しかし、体を動かして遊ぶことに苦手意識があり、教育時間の自由選択活動の中では、運動遊びに自ら挑戦しようとする事は少なかった。「やってみたいけど、怖いな…」という気持ちが先立ち「先生、座らせて」「押して」と保育者を頼る姿があった。A児の挑戦してみたい思いを大切に、背中を支えたり軽く押したり「まえ～うしろ」とタイミングよく声をかけたりすることで、自分で足を前後に振り、漕ごうとするようになった。保育者がゆったりと側で見守り、安心感のもと何日も繰り返し挑戦するうちに「今日もブランコする！」と自らブランコに座り、自分で漕ぐことを楽しむ姿が見られるようになった。長時間保育の中で、A児が「できた！」と達成感を味わうことが出来た。

〈考察〉

運動遊びになかなか挑戦しようとしなかったが、教育時間に保育者が誘いかけ、少しずつ体を動かす楽しさが芽生え始めてきている等、A児の姿を担任と共有し、成長や課題を常に話し合ってきた事で、長時間保育の中でのA児への援助や関わりをより意識する事が出来た。怖いと思いながらもやってみたいと思ったブランコに、長時間保育でゆったりと関わり、一緒に楽しむ時間を保障し、「やってみたい」という思いに応えた教育と保育の連続性がA児の経験や育ちの保障になったと考えられる。

5. 研究の成果

昨年に引き続き、毎月のカリキュラム会議の中で子どもの姿から課題を明確にし、各年齢の身体面の発達段階を確認し、園内研修等を通して具体的な遊びや環境の再構成など保育内容の充実を図った。

乳児では、体幹を意識し体を動かすことを遊びや生活の中で大切にしたい。保育者のあたたかいまなざしや楽しい気持ちを共有する言葉掛けの中で、安心して繰り返し体を動かして遊ぶことを楽しむ姿につながった。幼児では、発達年齢を考慮しつつも一人一人の子どもを見取り課題を明確にし、つけたい力が育まれるように具体的な遊びを検討し、繰り返し遊ぶ環境を整えた。また「できた！」という達成感が味わえるような、さりげない保育者の援助が次への意欲となり子どもの成長につながった。

0歳児から5歳児の発達を職員間で学び合い、つながりのある保育の大切さを再確認することができた。会議の中で職員同士が明日につながる具体的な遊びや環境を助言し合えたことで、保育者のスキルアップにもつながり保育・教育の質の向上につながった。

6. 今後の課題

乳児から幼児へのつながりのある保育の大切さを、3年間の取り組みの中で実感として感じる事ができた。0歳から5歳のこども園という体制の中で、話し合いをする時間の持ち方の難しさがあり、検討の必要がある。職員が共に学び合い互いに意見を出し合って高まった実践力を継続して保育に活かし一人一人の育ちにつなげていきたい。